等における人体あるいは各種材料中の吸収エネルギー 測定への適用をはじめ、SPring-8など第3世代放射 光のよりエネルギーの高いX線に対して、さらには原 子炉炉心、構造材内のガンマ発熱測定⁹⁾⁴²⁾にも適用で きると考えられる。

参考文献

- 1. Bragg, W.H., "Studies in radioactivity," Macmillan, New York (1912).
- 2. Gray, L.H., "Absorption of penetrating radiation," Proc. Roy. Soc., A122, 647 (1929).
- Gray, L.H., "Ionization method for the absolute measurement of gamma-ray energy," Proc. Roy. Soc., A156, 578 (1936).
- 4. Greening, J.R., "放射線量計測の基礎", 地人 書館 (1988).
- 5. Spencer, L.V. and Attix, F.H., "A theory of cavity ionization," Radiat. Res., 3, 239-254 (1955).
- 6. Burlin, T.E., "A general theory of cavity ionization", Br. J. Radiol., 39, 727-734 (1966).
- Laurence, G.C., "The measurement of extra hard x-rays and gamma-rays in roentgens," Can. J. Res., A15, 67 (1937).
- 8. Hubbell, J.H., "Photon mass attenuation and energy-absorption coefficients from 1 keV to 20 MeV," Int. J. Appl. Radiat. Isot., 33, 1269-1290 (1982)
- 9. Tanaka S. and Sasamoto, N., "Gamma-ray absorbed dose measurements in media with plural thermoluminescent dosimeters having different atomic numbers," J. Nucl. Sci. Tech., 22, 109-119 (1985).
- Shiragai, A., "A comment on a modification of Burlin's general cavity theory," Phys. Med. Biol., 29, 427-432 (1984).
- Janssens, A., "The fundamental constraint of cavity theory," Phys. Med. Biol., 29, 1157-1158 (1984).
- 12. Attix, F.H., "Introduction to radiological physics and radiation dosimetry", A Wiley-Interscience Publication, John Wiley & Sons, Inc., New York (1986).
- 清水滋、神之浦文三、岩田幸生、南賢太郎、"校 正用X線発生装置の性能と諸特性"、JAERI-memo 01-022 (1989).
- 14. Nariyama, N. and Tanaka, S., "Responses of LiF TLDs in different media and cavity ionization theory for low energy photons below

200 keV", J. Nucl. Sci. Tech., 34, 137-147 (1997).

- Hubbell, J.H., "Photon cross sections, atenua tion coefficients, and energy absorption coeffic ients from 10 keV to 100 GeV," NSRDS-NBS 29 (1969).
- Halbleib, J.A., Kensek, R.P., Mehlhorn, T.A., Valdez, G.D., Seltzer, S.M. and Berger, M.J., "ITS Version 3.0: The integrated TIGER series of coupled electron/photon Monte Carlo transport codes", SAND91-1634 (1992).
- 17. Straker, E.A., Scott, W.H., Jr. and Byrn, N. R., "The MORSE code with combinatorial geometry," SAI-72-511-LJ (DNA 2860T), Science Applications, Inc., May (1972).
- Berger, S.M., "An overview of ETRAN Monte Carlo methods," In: Monte Carlo transport of electrons and photns. Ed. Jenkins, T.M., Nelson, W.R. and Rindi, A., Plenum Press, New York (1988).
- Scofield, J.H., Lawrence Livermore National Laboratory Report UCRL-51326 (1973).
- Hubbell, J.H., Veigele, Wm. J., Briggs, E.A., Brown, R.T., Cromer, D. T. and Howerton, R. J., "Atomic form factors, incoherent scattering functions, and photon scattering cross section," J. Phys. Chem. Ref. Data, 4, 471-538 (1975).
- Hubbell, J.H. and Øverbø I., "Relativistic atomic form factors and photon coherent scattering cross section," J. Phys. Chem. Ref. Data, 9, 69-105 (1979).
- Goudsmit, S. and Saunderson, J.L., "Multiple scattering of electrons," Phys. Rev., 57, 24 (1949).
- Andreo, P., "Monte Carlo techniques in medical radiation physics," Phys. Med. Biol., 36, 861-920 (1991).
- Molière, G., "Theorie der Streuung schneller geladener Teilchen I: Einzelstreuung am abgeschirmten Coulomb-Feld," Z. Naturforsch., 2a, 133 (1947).
- 25. Berger, M.J. and Wang, R., "Multiple-scattering angular deflections and energy-loss straggling," In Monte Carlo transport of electrons and photons, Ed. Jenkins, T.M., Nelson, W.R. and Rindi, A., Plenum Press, New York (1988).
- International Commission on Radiation Units and Measurements, "Stopping powers for electrons and positrons", ICRU Report 37 (1984).
- 27. Landau, L., "On the energy loss of fast par-

ticles by ionization," J. Phys.(USSR), 8, 201 (1944).

- Nelson W.R., Hirayama H. and Rogers D.W. O., "The EGS4 code system," SLAC265 (1985).
- Nariyama, N., "Energy deposition calculations by low energy electrons," 第5回EGS4研究会, KEK Proceeding 95-9, 1-8 (1995).
- 30. Hubbell, J.H., "Photon mass attenuation and energy-absorption coefficients from 1 keV to 20 MeV", Int. J. Appl. Radiat. Isot., 33, 1269-1290 (1982).
- International Commission on Radiation Units and Measurements, "Radiation dosimetry: electrons with initial energies between 1 and 50 MeV," ICRU Report 21 (1972).
- 32. Majborn, B., Botter-Jensen, L. and Christensen, P., "On the relative efficiency of TL phosphor for high LET radiation," Proc. 5th Int. Conf. Luminescence Dosimetry, Sao Paulo, 124 (1977).
- Mukherjee, B. and Vana, N., "Self-absorption effect in LiF thermoluminescent dosimeters," Nucl. Instru. Meth., 226, 572-573 (1984).
- 34. Nariyama, N., Tanaka, S., Yoshizawa, M., Hirayama, H., Ban, S., Nakashima, H., Namito, Y. and Nakane, Y., "Responses of LiF TLDs to 10-40 keV monoenergetic photons from synchrotron radiation", Radiat. Prot. Dosim., 49, 451-457 (1993).
- Silva, H., "On analysis of the electron spectrum effect on LiF response to cobalt-60 gamma-rays," Nucl. Instru. Meth., B44, 166-171 (1989).
- Burlin, T.E. and Chan, F.K., "The effect of the wall on the Fricke dosemeter," Int. J. Appl. Radiat. Isotop., 20, 767 (1969).
- Horowitz, Y.S., Moscovitch, M., Mack, J. M., Hsu, H. and Kearsley, E., "Incorporation of Monte-Carlo electron interface studies into photon general cavity theory," Nucl. Sci. Eng., 94, 233-240 (1986).
- Seltzer, S.M. and Berger, M.J., National Bureau of Standards Report NBSIR 84-2931 (1984).
- 39. Seltzer, S.M. and Berger, M.J., "Energy deposition by electron, Bremsstrahlung, and ⁶⁰Co gamma-ray beams in multi-layer media", Appl. Radiat. Isot., 38, 349-364 (1987).
- 40. Lockwood, G.J., Ruggles, L.E., Miller, G.H. and Halbleib, J.A. "Calorimetric measurement

of electron energy deposition in extended mediatheory vs experiment", SAND79-0414 (1980).

- Garth, J.C., Burke, E.A. and Woolf, S., "The role of scattered radiation in the dosimetry of small device structures," IEEE Trans. on Nucl. Sci., NS-27, 1459-1464 (1980).
- 42. Simons, G.G. and Yule, T.J., "Gamma-ray heating measurements in zero-power fast reactors with thermoluminescent dosimeters," Nucl. Sci. Eng., 53, 162-175 (1974).

第3章 低エネルギー光子に対する TLD応答特性

3.1 放射光強度モニタリング技術の開発3.1.1 全吸収型マイクロ熱量計

全吸収型マイクロ熱量計の本体断面図¹⁾を図3.1に 示す。放射光ビーム吸収体と熱センサー1対、恒温体 からなり、それらが恒温槽の中に入っているいわゆる 双子型熱量計である。全体の大きさは幅75cm×奥57cm ×高さ101cmである。原理としては、ニュートンの冷 却則に基づいており、熱出力Pとビーム吸収体温度T の関係として次の式を用いている。

P = C(dTc/dt) + h(Tc - Te) (3.1) ここで、Cはビーム吸収体の熱容量、hは感熱素子の 熱伝達係数、Teは恒温体の温度であり、Tcとの差は 小さいとする。Teは一定に保たれているので、上式 を積分すると

Tc-Te = (P/h)(1-exp(-ht/C)) (3.2) となる。Cが十分に小さければ、1-exp(-ht/C)=1と なり、熱エネルギーQは、

 $Q = \int P dt = \int (T_c - T_e) dt$ (3.3) となる。hの値はあらかじめ校正を行うことによって 知ることができる。つまり、Qは、Tcが初期温度に戻 るまでの温度対時間曲線の面積を積分することにより



図3.1 マイクロ熱量計本体の断面

得られ、光子エネルギーは単一なので、そのQから光 子束が得られることになる。熱吸収体には、応答を速 くし、高感度を得るため、大きな熱伝達係数と小さい 熱容量をもつ材料が望まれる。そのため、銀、銅を用 いた。

光子は、27cmの空気層と60μm厚さのベリリウム窓 を通った後、銀または銅のビーム吸収体により完全に 止められる。そのビーム吸収体において発生した吸収 エネルギーが、熱電対を通して起電力を生じる。その 起電力を、もう一方の吸収体の周囲に巻き付けた抵抗 線によるジュール加熱により得た校正曲線を用いて、 熱出力に変換した。

吸収体の形状としては、カップ形状をとった。これ は、平板よりカップ形状の方が光子の逃げが小さいこ とを、K-X線も含めたEGS4モンテカルロコード⁴⁾計 算により確認したからである。計算によると、その光 子の損失は1.44%以内である。銀の方が若干その損失 が大きいが、熱伝達係数と熱容量の点では銅より優れ ている。熱輻射と対流による空気中への熱損失も誤差 の原因になるが、恒温槽はほぼ室温に制御され、セン サーの温度上昇は1K以下であるので、その影響は多 くて0.01%である。

双子型熱センサーの機械的、電気的な不均衡、恒温 体内の温度ゆらぎ、そして電気的な変動は、双子型熱 量計と室温との差を0.01K以内に制御した恒温技術に より最小化している。結局、バックグラウンドは0.15 $\mu V O \nu ベルに押さえられ、ジュール加熱による校正$ $により、本熱量計は0.9 <math>\mu$ W の熱出力を0.76%の精度 で測定できることを確認した。

そこで、実際に放射光に対する性能を確認するため、 そのビーム強度測定を行なった。Si(111)またはIn-Sb(220)2結晶モノクロメータを用いて単色化した10 keVから50keVの光子を熱量計に入射させた。ビーム サイズは、モノクロメータ前後のX-Yスリットにより 2.8x9.5~11.0x15.4mdに変化させ、数mJ以上の吸収エ ネルギーを得るため、3分から10分の間、光子ビーム を吸収体に入射させた。

出力は、光子が入射している間上昇し、入射を止め るとバックグラウンドまで戻る。熱出力は、そのピー ク面積を積分することにより得た。光子エネルギー、 ビームサイズ、ビーム吸収体を変えて同様な実験を25 回繰り返し、次項の電離箱の値との一致がすべて±3 %以内で再現されることを確認した。また、銅と銀の ビーム吸収体を用いた結果の間に有意な差は見られな かった。

3.1.2 自由空気電離箱

放射光強度モニターには全吸収型ではなく、透過型 の測定器を用いる必要がある。そこで、平行平板自由 空気電離箱を独自に開発した³⁾。装置の断面図を図3. 2に示す。ビーム方向の全長は10cmである。

単色化されたとはいえ、空気吸収線量にして最大 0.55Gy/sの強度を持つ光子ビームは、イオン再結合、 空間電荷効果、電場のねじれ⁴⁾を引き起こす可能性が ある。そこで、測定に先立ち、前述の全吸収型熱量計 を用いて電離箱を校正した。照射線量率E_xは次の式 により求めた。

$$E_x = I_s K h(al)^{-1} \rho^{-1} A^{-1}$$
 (3.4)

$$\rho = 273.15 \rho_{a} p T^{-1}$$

Isは飽和電流値、K_hは湿度補正係数、aはX線ビーム 面積、lは電極長、 ρ_0 は0℃、1気圧における空気密 度、Tは温度、pは気圧、Aは絞り・電極中心間の空気 中における光子減衰率を表す。飽和電流値I_sは、一般 再結合損失を評価するため、加電圧を変化させ、外挿 法により求めた⁵⁾。

 $I^{-1} = I_s^{-1} + constant E_v^{-2}$ (3.5) ここで、Iは測定電流値で、E_vは集電場値を表す。加 電圧無限大時の電流値I_sと電圧2800Vの電流値の比は、 10keVで0.984、20keVで0.99ほどであった。電離箱を 熱量計の前に置き、上向き5.1mradのビーム軸に平行 になるよう電離箱の設置角度を調節した。そして、10 ~50keV光子に対して両者を同時測定した結果、光子 の絶対線量は測定の間、2.8%の精度でモニターでき ることを確認した。



(73)

3.2 直線加熱TLDリーダーの開発

3.2.1 RandallとWilkinsの式

RandallとWilkinsによると、温度TにおけるTLDの 発光強度Iは

 $I = -dn/dt = s \cdot exp(-E/kT)n$ (3.6) の式で表される⁶⁾。ここで、nはトラップされている 電子数、sは頻度因子、Eは活性化エネルギー、kはボ ルツマン定数、Tは絶対温度を表す。もし、加熱速度 βで直線加熱すると、Tは

$$T = T_0 + \beta t$$
 (3.7)
と表されるので、式 (3.6) は、

$$n(T) = n_0 \exp\left\{-\frac{s}{\beta} \int \exp(-E/kT') dT'\right\}$$
(3.8)

となる。つまり、式(3.1)は $I(T) = n_0 sexp(-E/kT)exp$

$$\left\{-\frac{s}{\beta}\int exp(-E/kT')dT'\right\}$$
(3.9)

となる。ここで、式 (3.9) を微分し、=0とおくと $\beta E/(kT_m^2) = s \exp(-E/kT_m)$ (3.10)

すなわちピーク温度Tmは、加熱速度βに依存することが導かれる。

また、熱クエンチにより、積分量も変化することが 報告されている。つまり、蛍光の放出は温度に依存し ないが、非放射遷移確率は温度とともに急速に増大す ると考えられている。もしそうであれば、発光効率は、 温度とともに減少する。そうした依存性が熱クエンチ と呼ばれる。実際、Gorbicsらは、CaF₂:Mn、LiF、 CaSO₄:Mnにおいてグロー面積の温度依存性を観察 している¹⁾。こうしたピーク温度、積分量の依存性か ら、熱ルミネセンスを測定し、グロー曲線を観察する



には、温度再現性に優れ、直線加熱を行えるリーダが 必要となる。

3.2.2 システム

TLDのグロー曲線を含めた応答特性を調べるため、 直線加熱のリーダを開発した⁸⁾。システムは、図3.3 に示すように、TLDリーダーユニット、冷却水ユニッ ト、出力記録ユニットの3つのユニットからなる。冷 却水ユニットは、半導体電子冷却コントローラーを装 備し、白金製プランチェットの加熱速度を一定にする。 加熱されたTLDからは熱ルミネセンスが放出され、 2種類の光フィルターを通って光電子増倍管 (Hamamatsu R-1288) に入射し、熱ルミネセンス 強度に比例した光電子増倍電流を発生させる。その 0.01nAから100µmの光電子増倍電流と白金製プラン チェットに接触するCA熱電対によってモニターされ たTLD温度が、電流デジタイザーにより最適のS/N 比を得るよう1ミリ秒毎にデジタル化され、分析レコー ダー (Yokogawa 3655E) に送られる。ちなみにデ ジタイザーの直線性は、0.1%以下の精度で保証され ている。

3.2.3 加熱特性

TLDの加熱方法として、オーム加熱、ガス加熱、 赤外線加熱⁹⁾、レーザー加熱¹⁰⁾などがあるが、ここで は、ルーチン作業に用いるのでなく、直線性、再現性 に優れた加熱を行うことにより解像度の優れたグロー 曲線を得ることを主目的とすることから、オーム加熱 法を採用した。プランチェットは酸化による表面状態 の変化を避けるため白金からなり、直径13mm、深さ5 mのカップ型をしているため、リボン、ペレット、粉 末、液体など多様なタイプの熱ルミネセンス測定に適 用できる。TLD周りの空気は、図3.4(b)の280℃以上で 現れているような非放射性誘起信号¹¹⁾を避けるため、 測定時には窒素ガスによって置換される。その効果は、 図3.4(a)に示すように測定によって確認した。弁を調 節することにより、毎回、ガスの流入速度は一定にさ れる。

グロー曲線は、TLD温度と熱ルミネセンス強度に よって表され、その形状は温度上昇率に依存する。そ の温度を冷却ユニットにフィードバックすることによ り、室温から450℃までの範囲で温度を制御する。0.5、 1、2、3、5℃/sの加熱速度を利用できるが、こ の加熱速度は、TLDとプランチェットの温度差を最 小化させるために、通常のTLDリーダーの加熱速度 よりむしろ遅い。2℃/sの温度上昇プロフィールを 光電子増倍管のバックグラウンド出力とともに図3.5 に示す。上昇率の変動は、毎秒3℃の上昇率の時に最 大になるが、それでもほぼ±2%の誤差内で制御され、



図3.4 窒素ガスが(a)ある場合と(b)ない場合の バックグラウンド電流 (加熱速度2℃/s、青フィルター装着)



図3.5 加熱速度2°C/s時の温度直線性

またぞの再現性を確認した。

現システムでは、TLDの温度というのは実際には 白金製プランチェット裏面の温度であり、TLDと熱 電対間の温度差は避けがたい。その差異をなるべく小 さくするため、加熱中のプランチェット表面の温度を、 放射温度計(ミノルタ TR0506C)を用いて、±10℃ の精度で測定し、その値を用いて熱電対の測定温度を 校正した。

3.2.4 光フィルターと光電子増倍管

光電子増倍管の暗電流は、温度とともに上昇するが、 その大きさは光フィルターに依存する。3種のフィル ターの光透過曲線を図3.6に示す。赤外線フィルター (HA30)は、透過させる波長領域がもっとも広いた め、TLD周囲の加熱部から放射される長波長の熱電 子を除去するために、常時装備している。紫外線フィ ルター(B-390)は、青色をしており、400nm付近の 光のみを透過させるため、図3.4(a)に示すようにバッ クグラウンド電流が顕著に少なくなり、ピーク波長が 400nmのLiF¹²⁾や368nmのLi₂B₄O₇:Cu¹³⁾に有効であ る。BeOとCaSO₄素子については¹⁰⁾、もう1つの紫外 線フィルター(CS-500)を光電子増倍管のバックグ ラウンド電流を減少させるために用いる。図3.7にそ のバックグラウンド電流値を示す。

光電子増倍管の選択は、低ノイズで広い測定レンジ をもつTLDリーダーを実現するために重要である。 本システムに装備している浜松フォトニクスのR-1288 光電子増倍管は、図3.8に示すように、たいていの熱 ルミネセンススペクトルを含む300から600nmの波長 をもつ光に敏感である。また、-1500Vが、増倍管へ の最適な加電圧として推奨されるが、増倍管の利得は、 図3.9に示すように、-1100Vまで加電圧に比例する ことを確認した。熱ルミネセンス出力が100μAを越 えるときには、低い加電圧が有用である。他方、現シ ステムのバックグラウンドは、HA-30とB-390の2種 のフィルターを用いたとき、図3.4(a)に示すように、 0.01nA以下である。結局、現システムは、7から8



図3.6 フィルターの光透過曲線



桁のオーダーをカバーする広レンジで使用できること を確認した。

3.3 放射光を用いたTLD応答測定

3.3.1 エネルギー、線量応答の定義

エネルギー応答は、従来いくつかの定義のもとにデー タがまとめられてきた。すなわち(1)TL応答/空気吸 収線量(照射線量)、(2)TL応答/水(ファントム)吸 収線量、(3)TL応答/TLD吸収線量、(4)TLD吸収線量 /空気吸収線量などである。(1)(2)は、[∞]Coγ線による 校正時のみに空洞理論を用い、(3)は、加えて空気吸 収線量からTLD吸収線量に変換するときに空洞理論 を用いる。(4)は、測定なしに計算によってのみ値を得 る。空洞理論の適用性が確認されているエネルギー領 域あるいは媒質では、基本的に(1)(2)と(3)は表現が異な るだけである。測定値間の相互比較のためには、その 定義を明らかにしておくことが重要であり、本研究で は、(1)の定義を用いた。

線量Dにおける熱ルミネセンス線量応答f(D)は、

 $f(D) = (F(D)/D)/(F(D_l)/D_l)$ (3.11) と定義した。ここで、 $F(D_1)$ は、低線量D₁、すなわ ちf(D)の直線領域で測定した熱ルミネセンス信号強 度を表す。線量Dには、空気あるいはTLD吸収線量を 用いた。

3.3.2 実験条件

実験は、高エネルギー物理学研究所内にあるフォト ンファクトリー(PF)の2.5GeV陽電子蓄積リングか ら放出されるシンクロトロン放射光を用いて行っ た15.16)。利用したビームラインは、垂直ウイグラーが 挿入されているBL14C^{III}である。実験体系を図3.10に 示す。シンクロトロン放射光自体は、広がりのあるエ ネルギースペクトルを持つので、Si(111) 単結晶から なる2結晶モノクロメータを用いて10keVから40keV の単一エネルギーのX線を取り出した。分解能は約60 eVである。しかし、ブラッグ反射の条件¹⁸より、そ の単一エネルギー光子ビームは、エネルギーにして3 倍の高調波を含む。この高調波が、測定値にいくらか の誤差を持ち込む可能性があった。そこで、真空ボッ クス内に設置したベリリウム箔により散乱されたエネ ルギースペクトルをHp-Ge検出器で測定し、この望ま しくない成分強度をモニターした。10keV光子に対す るスペクトルの一例を図3.11に示す。10keVの他に30、 40keV高調波のピークが現れている。しかし、2結晶 モノクロメータでは、第1結晶と第2結晶の角度を完 全に平行な位置からわずかにずらすことにより、高調 波成分を減らせることが知られている。これは、屈折 の効果によりブラッグ反射曲線の中心角度が基本波と 高調波ではわずかにずれ、かつ反射の角度幅が高調波 の方が狭いことを利用している¹⁹。実際、本方法によ り高調波を0.3%以下にまで減らすことができたので、 実験におけるTLD内の吸収線量への影響は無視でき た。

TLDへの照射線量は、線量計の前に前述の平行平 板自由空気電離箱を置いて、モニターした。光子ビー ムの断面は矩形をなしており、縦の長さはおよそ10mm、 横の長さはエネルギーが小さくなるほど大きく、典型 的な長さとして、10keVで10mm、30keVで6mm、40keV で5 mmであった。そのビーム内の線量分布を見るため、 モニター電離箱の前部に設置した0.5mm幅のスリット をもつタングステン板を、垂直あるいは水平に移動さ せることにより、ビーム内の強度分布を測定した。10 keVX線に対する結果を図3.12(a)(b)に示す。垂直方向 には部分的に均一な強度分布があるが、水平方向には 全体に不均一であることが明らかになった。そこで、 垂直方向の不均一領域はコリメータで遮蔽し、水平方





向はTLDを走査することによってその不均一分布を 平均化させた。照射線量率は、蓄積リングの電流値お よびモノクロメータの角度調整に応じて、空気吸収線 量率にして $4.2x10^{-4}$ Gy/sから $5.5x10^{-1}$ Gy/sまで変 化した。しかし、そうした線量率のばらつきは、文 献²⁰¹²⁰¹から考えて、TLDの応答に何ら影響を及ばさな いと考えられる。

TLDには、第2章で用いたLiF(TLD-100)素子と 松下電器産業㈱製のLi₂B₄O₇:Cu、CaSO₄:Tm、BeO 素子を用いた。各素子の形状、アニーリング方法を表 3.1に示す。アニーリング後はすべて、自然冷却した。 Li₂B₄O₇:Cuは湿度に影響され、湿度90%の環境下の もとでは、2ヶ月で10%ほど感度が落ちる²⁰。そこで、 測定時以外はデシケータに保存した。他方、BeOは光 フェーディングを示すことが報告されており²⁰、通常 の蛍光灯程度では1日さらされてもほとんどフェーディ ングしないが、強い光や長時間ではその影響を無視で きないため、照射はハッチ内の照明を消して行い、照 射時以外は黒い樹脂ケースに入れて保存した。

図3.10の実験体系では、入射光子ビームは完全に平 行で、単一エネルギーと見なせるので、TLD内の減 衰は光子減衰係数を用いて容易く計算することができ る。散乱光子のビルドアップを無視でき、TLD内の 光子減衰が指数関数的であるとすると、補正係数は第 2章の式(2.14)で与えられる。こうして、Hubbell の線減衰係数のデータ⁵⁰を用いて評価したLiF、Li₂ B₄O₇:Cu、CaSO₄:Tmの補正係数を、表3.2に示す。 計算では、活性体であるLiF中の0.054重量%Mg⁵⁰、 Li₂B₄O₇:Cu中の0.05%Cu、CaSO₄:Tm中の0.005% Tmの影響を考慮している。BeOは2層の円柱形状を しており、式(2.14)を直接適用することができない ので、計算を行っていない。

電離箱中心とTLD間には長さ24cm分の空気が存在 し、そこでの光子の減衰は、10keVで13.5%、15keV で4.5%、20keVで2.2%、30keVで1%、40keVで0.7 %である。

すべてのデータは、まず3.2節のTLDリーダを用い てそのグロー曲線を測定し、積分した。これは、ピー ク高さを測定する方法に比べて優れている。理由は、 横軸を時間にとった場合、ピーク高さは加熱速度に比 例することになり、その精度に大きく依存する。また、 最大ピークは複数ピークの重なりの結果であることが 多く、そのため、加熱の状態や皿の状態の影響を受け やすく、再現性が積分法に比べて劣るからである。

校正は、第2章と同様に[®]Co γ 線で行い、熱ルミネ センス強度を4.37x10⁻²Gyから4.37x10⁻¹Gyの異なる 線量に対して4.7%以下の精度で校正した。実験では、 3個以上のTLD素子を、直線領域にある少なくとも 2通りの照射線量で自由空気中において照射した。ま





表3.1	各TL	Dの大き	ちょ	とア	<u> </u>	IJ	$\boldsymbol{\nu}$	グ方法
470.1				<u> </u>				2 2 1 LLS

表3.2 TLDの自己吸収

TLD	Z _{eff} ²⁴⁾	Size(mm)	Anealing	Energy(keV)	LiF	Li ₂ B ₄ O ₇ :Cu	CaSO₄:Tm
LiF	8.14	3. 8×3. 8×0. 038	400℃, 1 h	40	0.99	1.0	1.00
Li₂B₄O⁊:Cu	7.3	3φ×0.09 on polyimid film	300°C, 15 min	30	0.98	1.0	0, 98
Be0	7.13	1.0 ϕ in 1.2 ϕ X8 glass tube	450°C, 60 min	20	0.96	1.0	0. 93
CaSO ₄ :Tm 15	15	3φ×0.09 on polyimid film	400°C, 5 min	15	0.91	0. 99	0.84
$Z_{\text{rff}}(\text{tissue})=7.4$				10	0.75	0.96	0.60

(78)

た、Li₂B₄O₇:Cu、CaSO₄:Tmの照射は、ポリイミド フィルムの影響を最小化するため、とくに素子側を線 源に向けて行った。

3.3.3 フッ化リチウム (LiF) 測定結果 3.3.3.1 グロー曲線

図3.13(a)(b)は、[∞]Coγ線と10keVX線をそれぞれい くつかの線量でLiFTLDに照射し、毎秒2℃で加熱す ることにより記録したグロー曲線である。0.5~5℃/s



図3.13(a) [∞]COγ線に対するLiFの 加熱速度2℃/s時のグロー曲線



図3.13(b) 10keVX線に対するLiFの 加熱速度2℃/s時のグロー曲線

のいくつかの加熱速度で加熱しても、その積分値はお 互いに5.5%以内で一致したので、本実験ではエネル ギー応答、線量応答ともすべて2℃/sの加熱速度で 測定した。

LiFのグロー曲線はいくつかのピークから構成され ている。Fairchildらは、室温以上で11のピークを観 察している³⁷⁰。標識番号と加熱速度10.3°C/minのピー ク温度はそれぞれ、1(62°C)、2(94°C)、3a(112°C)、 3(137°C)、4(170°C)、5(190°C)、5a(210°C)、6(235 °C)、7(260°C)、8(285°C)、9(315°C)、10(345°C)、11 (370°C)である。主ピークはピーク5にあたる。図3.13 (a)を見てわかることは、線量とともに高温部ピーク が増大している点である。この定量的評価については、 3.3.3.3の線量応答の説明の項で行う。また、図3.13(a) (b)を比較して、低エネルギー光子の方が高温部ピー クの割合が若干高い。この割合についても、次のエネ ルギー応答の項で評価を行う。

3.3.3.2 エネルギー応答

測定したLiFのエネルギー応答を図3.14に示す。縦 軸は発光/空気吸収線量を表し、すべて[®]Co γ 線の値 で規格化している。同図は、グロー曲線の60℃から320 ℃までの面積を積分して得た。また、210℃以下、以 上で積分することによって求めた主ピーク、高温ピー ク応答を、図3.15に示す。両者とも、バックグラウン ドは、前もって測定したバックグラウンド値を定数と して差し引いた。異なる照射線量間で有意な差は見ら れなかったので、平均値を対応する標準偏差ととも に示している。計算値は、空洞理論に基づき計算した。 40keV、100keVのエネルギーをもつ電子のLiF中にお けるCSDA飛程は、ほんの3.65 x 10⁻³、1.78 x 10⁻² g/cd^{*}であり、TLDの厚さ0.1 g/cd^{*}よりずっと小さ い。つまり、100keV以下で計算された応答は、空気 の実効原子番号が小さいこともあり、LiFTLDの空気



図3.14 LiFの全ピークに関するエネルギー応答



図3.16 光子エネルギーに関する高温ピークの 全ピークに対する面積比

に対する質量エネルギー吸収係数の比に等しい。した がって、計算値の誤差は、Hubbellによって評価され た質量エネルギー吸収係数⁴⁰の誤差、すなわち±2% にほぼ等しい。

全応答測定値の平均は、20keV以上のX線に対して 計算値より6%ほど大きいが、15、10keVエネルギー においては誤差内で一致する。また、主ピークの応答 測定値は、20keV以上でほんの4%ほど大きいが、高 温ピークの過大応答は、10keVから40keVの間で17% から41%に達している。高温ピークのこの過大応答は、 空洞理論による計算値より2倍ほど大きいBuddらの データ²⁰より小さい。その違いは、加熱方法とアニー リングにおける冷却方法の違いによるものと思われる。 Buddらは、ランプ加熱後、300℃の温度でプラトー加 熱し、アニーリングは、主ピークに対する高温ピーク の感度を上げるため、TLDを毎分3℃ほどの速度で 80℃までゆっくりと冷却しているからである。

図3.16に、光子エネルギーに関する全ピークに対す る高温ピークの割合を示す。その割合は、[®]Coγ線に 比べて35keV以下では、光子エネルギーの減少ととも にわずかずつ増大し、10、15keVでは30%大きい結果 を得た。

3.3.3.3 線量応答

図3.17に、[®]Co γ 線、30keV、10keVX線に対して測定した線量応答値を示す。データは、グロー曲線の面積を、320℃まで全積分することによって得た。横軸は、空気吸収線量を表す。どのエネルギーも、5 Gyまで直線性を示し、それ以上では、線量応答が増大するsupralinearity(超直線性)を示し、数百Gy付近で最大になった。その最大値は、10、30keVX線、[®]Co γ 線に対して、それぞれ約2.0、2.8、4.3とエネルギーが高くなるほど大きい値を示した。

主ピーク、高温ピークの線量応答は、エネルギー応 答と同じ温度領域で積分して評価した。高温ピーク面 積の全ピーク面積に対する比を、図3.18に示す。明ら かに、高温ピークの割合は線量とともに大きく増加し、 しかも光子エネルギーが小さいほどその割合は大きい。





